

ひとぞ尊き

～柏沢分校水難事故における教師殉職～

昭和45年4月24日、古口小学校柏沢分校の伊藤弘・小関正芳の両教諭と全校児童8名は、5月1日の「古口小学校春の運動会」に備えて外川・白糸・柏沢3分校で合同ダンス練習を実施後、大きな事故に巻き込まれることになった。後にいう柏沢分校水難事故である。

午後3時5分草薙発のバスで柏谷沢バス停留所にて下車し、3時20分頃、渡船場より乗船。約30M程度沖合に出た地点で、午後3時25分頃、モーターが突然発火して燃え出した。

2人の先生はすぐ船尾に移り消火に当たった。船頭は大急ぎで船が流されるのを止めようといかりを下ろしたところ、いかりが急速に水中に引っ張られて先から没して転覆してしまった。船頭を含めた11名が最上川に投げ出された。当時の川は、折からの雪解け水で、2メートルも増水している状態だった。

2人の先生は、おのが身をかえりみず、激流に抗しながら子どもたちに円陣を組ませて指示を出し続けたという。そして急流に流された子ども達を1人ずつ助け、救助に来た別の船に子どもたちを託した。まさに、命がけの救助だった。

川に投げ出された8人全員の子ども達の救助を確認した時、二人の先生には自分を支える力さえもなくなっていた。岸に向かって泳いでいったが、伊藤先生は、岸の手前10Mくらいで見えなくなってしまった。小関先生は、救助の時に、1年生が先生にすがりついたため、友達の方に引っ張っていった。その後2、3回水面に見え隠れしたが姿が見えなくなった。2人とも力尽き果て、渦流の中にのまれてしまった。当時、伊藤先生・小関先生共に25歳の若さであった。

警察や保護者、PTA、地区住民など懸命の捜索が続き、後に息絶えた二人の先生が川から引き上げられた。6月3日に立川町（現：庄内町）狩川で伊藤先生が、6月17日に酒田市両羽橋下流で小関先生が発見された。

7月14日 古口小学校葬を行い、10月30日 大阪公園内「教育塔」に合祀された。

昭和46年4月28日 殉難の碑が完成し、除幕式が行われた。

昭和45年12月、県小・中学校長会、県教組が発起人となり殉難された両教諭の遺徳を後世まで偲び、その顕彰と慰靈、そして教育の明るい未来に願いをかけて殉難碑を建立する。市町村教委、各小中学校、各PTA、教職員等寄付により建立された。

平成5年4月24日 殉難歌碑除幕式が行われた

平成4年10月第1回建立発起人会の立ち上げの趣旨

「最上川殉難より23年の歳月が過ぎたが、青年教師の崇高な殉職であった。時の文部大臣 坂田道太氏は自作の歌に託し、その行動を讃えている。ここに、殉難を永久に忘れずに慰靈のため歌碑を建立するものである。」

おのが身は かへりみずして 教え子の
生命護りし ひとぞ尊き

歌碑は、村及び地域の方々の募金・寄付によって建立された。

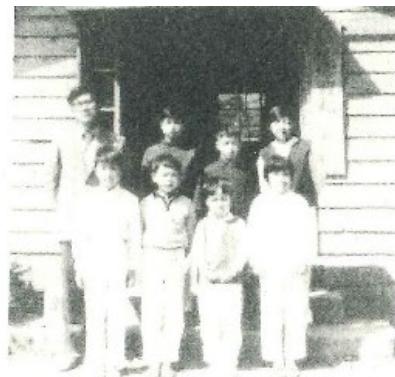
この事故がきっかけとなり、柏沢・柏谷沢と最上川の清川大橋とをつなぐ道路の必要性が後に認められることになり、6年後の昭和51年には、松山町道白糸線が開通した。さらに向松坂の米坂橋、金打坊の金打坊橋などの架橋陳情の際にも次の言葉が合言葉となって地域住民の願いが実現されることとなった。

「柏沢の悲劇を繰り返すな」

あれから30年以上が経つ。救助されたのを見届けて力尽きた両先生の魂は、人々の心に深く生き続けている。今なお、土地の人たちによる献花は絶えたことがない。



分校に赴任するのは若い先生でした。
1年目の分校主任、伊藤先生。(上段左)



交代でシャッターを押す。
柏沢分校小関先生。(上段左)



のどかな渡船風景はどの渡し場で
も当たり前と誰もが思っていました。